

夏目漱石とクラシック音楽

(第23回)

ショパン・アーベント

音楽学者・元東京藝術大学特任教授

瀧井 敬子

4才頃の記憶なので、あまり定かではない。

私が生まれた札幌の家には、母がペチカと呼んでいた大きな暖炉のある応接間があった。父の自慢の蓄音機は、左の壁面の中央に鎮座していた。週末には、「蓄音機コンサート」と称して家族でクラシック音楽を楽しんだ。一番熱心な聴衆は、祖母だった。彼女がとりわけ好きだったのが、ショパンの「幻想即興曲」である。

「本当いい曲ね…胸がスーッとするわ。良澄さん、お願い、もう一回かけてくださいな！」

良澄りようちようとは、父の名である。僧侶の長男だったので、最澄さいしやうにあやかった命名であった。「幻想即興曲」作品66は5分程の長さなので、SPレコード盤の片面に入ってしまう。だから、レコード盤を裏返す必要もない。父は義母、すなわち私の祖母のリクエストに、いつも快く応じていた。

さて、夏目漱石がショパンの作品を初めて聴いたのは、大正4年（1915）10月3日のことである。「ショパン・アーベント（＝ショパンの夕べ）」と銘打って、彼のピアノ曲をずらっと並べたコンサートであった。学習院出身の華族が発起人となった音楽奨励団体の主催だったので、会場は華族会館2階の大広間。文学士の上野直昭なおてるが幹事役で、雑用を一手に引き受けていた。漱石は彼からチケットをもらったのである。ちなみに、上野直昭は戦後、東京藝術大学の初代学長になっている。

大正4年10月3日のピアニストは、東京音楽学校がドイツから招聘したパウル・ショルツ（1889－1944）であった。漱石は4日前に、手紙で寺田寅彦を誘っている。

拝啓、来月三日夜七時開場七時半開演の華族会館の音楽会へ行つて見ませんか。音楽学校のショルツという人がショパンの曲ばかり弾くのださうです。（大正4年9月30日付）

寅彦の日記（10月3日付）によると、漱石先生とは華族会館の門前で待ち合わせ、寅彦も上野直昭からチケットをもらって入場したのだという。

夜7時半に開演、10時に終了したプログラムは三部構成で、全17曲（『音楽界』11月号）だった。

第一部：英雄ポロネーズ、スケルツォ第1番、バラード第1番。

第二部：ノクターン第1番と第2番、マズルカ第21番、マズルカ第25番、華麗なる大円舞曲op.18、華麗なる円舞曲op.34－1。

第三部：華麗なる円舞曲op.12、幻想即興曲op.66、子守歌op.57、タランテラop.43、「ポーランドの歌」より3曲（ショパン作曲の歌曲をリストがピアノ独奏曲に編曲したもの）、幻想曲op.49。

私の祖母が大好きだったショパンの「幻想即興曲」を、夏目漱石も聴いていたのだった。